

---

# 双炎の廻る回旋曲

ヲタロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

双炎の廻る回旋曲

### 【Zコード】

Z1615Z

### 【作者名】

ヲタロウ

### 【あらすじ】

人々は個々の才能を『開花』させ、ブルームを手にした。人々はブルームによる絶対的な力を駆使し、さらなる飛躍と輝かしい未来への一步を踏み出す。シグムンド帝国の学生レイヴアンは友人のケントと『部隊』を創設。部隊の仲間達はそれぞれのコメを叶える為、日々奮闘する物語。

お初です。処女作です。つまんなかったらごめんなさい！  
舞台は異世界。でも転生モノではありません。主人公とその仲間達

でワイワイ的な感じだつたり。主人公は二人。  
文章堅くてごめんなさい。目指せ！完結！  
破天荒とクールです。

## Prologue ～混沌の時代～（前書き）

語彙とか大丈夫だよね……？

誤字、脱字とか、文章構成のアドバイスとかお願いします！  
一応推敲してから出しますけど不安……

## Prologue ～混沌の時代～

ブルーム、それ人類最高にして最低の現象である。

先天、後天を問わず、人間には必ず何らかの才能が備わっている。しかし、人間は自分の才能を十分に發揮出来なつたり、持て余したりする。

だが、このことを百年ほど前、ある人物が、「人間は己の能力を十分に御しきれていなことが原因である」と仮定し、実験を繰り返した。

その結果、その人物は自らの仮定を証明することに成功。その後、全世界に広まつたこの実験結果は、人類の才能の限界を否定した。つまりこの証明は、人類の無限の可能性を証明したのだつた。

その後、多くの名高い科学者や研究家達によつて研究は進歩の道を辿る。全世界の注目は、この一点に絞られた。

彼らはこの研究にすべての情熱を注ぎ込んだ。彼らの活躍は筆舌に尽くしがたく、志半ばで過労死する者もいた。だが、彼らは、人類には希望に輝く新たな可能性を人々に伝えたいが為に、日々研究に没頭した。

世代を重ねる事になつたが、彼らはわずか二十年余りで驚くべき発見をした。

「人々の才能の成長には限度が無い。そして覚醒によつて我々人間は個々の能力をさらに有益に、そして形あるものとして、使役することが可能である」と。

つまり、個人の能力は文字通り目に見えるようになるようになつた。

例えば、料理が得意な人だつたら、包丁がひとりでに宙を舞つて食材を刻み、勝手に鍋がそれを煮る。

研究者達の血の努力によつて、人類は今までに無かつた、人とし

ての範囲を超えた力を手に入れた。

人々は誰もが嬉々としてブルームを甘受していた。しかしあがて人々は『気づいて』きた。これまでの兵器ではブルームには全く対抗できない。ブルームによつてある人は海を割り、またある人は容易に山を砕き地形を変えることもできるようになつたのだから。人々にとつてブルームはあまりにも規格外。それまで人々の希望ともて離された異能の力は恐怖の対象に成り下がつた。

今や、かつてに人々の努力も夢も枯れ果てて、度を超えた暴力と残酷な人欲は螺旋を描くようにねじっていく。

## Chapter 1 戦火の足音

太陽が昇るより早い朝に、赤い髪の少年が回廊を疾駆する足音が木霊する。昼過ぎにはたくさんの人々で混雑するこの街道も、今は薄く靄がかかり、出口も見えず、視界の限り誰もいない。

少年が走るのはコーカサス大陸の極東にある、周りを多くの小国によつて囲まれた、シグムンド帝国が誇る帝都シグルズの街道である。

この都市は世界で唯一都市全体を城に呑み込まれた『城塞都市』で、世界一の鉄壁の守りを実現している。何故こうなつたのか？数年前から人々はブルームと言われる莫大な力を手にした。本来、福祉や人類のさらなる発展の為に研究者達が何年にわたる苦労の末、発見したものだ。

しかし人々の中にはこれを悪用しようと企む輩がいる。彼らの中には単なる犯罪者ではなく各国の政治に関わる者達、つまり革命の思想を持つたグループがいた。

彼らはブルームにより急速に力を蓄えていった。そして国家に十分に対抗することができる戦力になることが予想された。彼らは自称『高貴な』思想に沿つて行動を開始した。実質の行動内容は、略奪、暗殺、風評工作などの手段を選ばないものであり、これらの犯罪的行為は民間にも及んだ。

当然、国家と革命家達は次第に対立を深め、国家は革命家達を掃討するように命じた

しかし国家は些か浅はか過ぎた。国家が行動を起こすようになった頃には、革命家達は既にブルームによつて大きな戦力を手にした後だつたのだ。未知の力であり、不確定要素の多かつたブルームを軽視していた国家は大敗北を味わつた。

そして今、国家は革命家達との紛争や、他国からのブルームを使つた侵略者の追討、そして同じような境遇に立たされた隣国、これ

らの載積した争いごとにブルームを使用することを決定。

全ての国家が似たような経緯を辿り、世界中で混迷の時代と化したのだ。

話はこの地に戻る。

シグムンド帝国は度重なる戦争から、国を守るために行われた政策の一つで、主要道から路地に至るまで、全ての道が城の中にある、施設、売店、民家などの建物も皆が例外無く城の一部となっている。従つて、この町は高い安全性から人口が多く、特に学者や学生達に人気が多い。

そのためシグルズは学業の街としても名高く、最も有名なのが先代シグムンド帝國王の方針によって設立された巨大図書館である。この図書館は科学者達の要望によって創設され、街の安全面と相まって学者達の間で尊になることで、より多くの知識人が集まつた。すると図書館もさらに大規模になり、より多くの知識に対し貪欲な彼らをますます呼び寄せるようになった。その結果、集まつた知識人達によつて、街の防備がさらに堅くなる。それがまた学者達を呼び集め……と、その繰り返しでシグルズは世界屈指の防御力を誇るほどになつたのだ。

しかし大規模な城にありがちな薄暗い雰囲気は微塵も無く、大理石が敷き詰められた床やティティールまできらび煌びやかな彫刻が施されている柱は古典的で、明かり窓から差し込んだ光のラインがカーテンのように掛かつてゐる。そのためか、この城は神々しささえ醸し出しているようにも思える。

現在、少年が走つているのは街のちょうど中心にある巨大図書館から放射線状に広がる街道の中でも、帝都の関所に通ずる道路である。いわば、この町の主要道である。

少年の背は少し高め、瘦せてはいないが、活動的に引き締まつた無駄のない姿からはいくら走ろうとも少しも暑苦しさを感じさせない。やや気性の荒そうな表情を象る顔の方、つまり額にバンダ

ナが巻かれ、それによって立たされた激しい烈火のようすに赤い髪は自らの主の性格を顕著に示している。

また彼は学生なのだろう、城塞都市シグルズに一つしかない、世界有数の有名校で、学業の都市であるシグムンド帝国でも学力をはじめ、技術力、体力、その他如何なる面でも比肩する学校はどこにも無いとまで謳われた『シルフィエンド国立学園』の制服に身を包んでいる。この学校は珍しいしきたりや規則が多く、このような事は特に由緒正しい学校にその傾向が多い、また幸か不幸かシルフィエンド国立学園はその由緒正しい学校の代表格だった。従つて、シリフィエンド国立学園の規則は全世界でも極端に捻くれている。滅多にないが、先に事情を全く何も知らずに入学などした暁には、最初の一ヶ月は授業の内容よりも大量の規則を覚える事に辟易するのも無理はないとも言える程だ。

また、この学校は、巨大図書館と同じように学者たちの要望によつて設立されたので、設立と同時に巨大図書館を吸収して一体化してしまつたので、巨大図書館の閲覧はシリフィエンド国立学園の学生と講師の特権となつていている。

巨大図書館に向かう少年の足にあわせて、汚れ一つ無い、潔癖ともいえる町の景観が左右に分かれて飛ぶ様に流れていく。かなりの速度で走つていてる証拠だ。

さつき太陽がのぼ昇つてきたから、赤い髪の少年はかなりの時間走つてゐる事になる。

少年は十五、六歳にみえるが、その歳にしてはこの体力は尋常ではない。しかし彼のスピードは少しも鈍らず、むしろ加速しているようにもみえる。それどころか彼の顔には疲れなどは一切見えず、少しの息の乱れすらない。

今日は少年の学校は無い、理由は知らされていないが、昨日、休校の旨を伝えられた時の担任の表情から、何か大事が隠されている

のは、誰の目にも明らかだつた。

だから昨日、大半の学生達はその《何か》に備えて図書館にいつた。なぜなら学生達は兵士とは違い、一般的に腕っ節が立つ訳ではなく、もし戦争などが起きたら、即戦力になることはまず無い、逆にできることといつたら、頭を使つぐらいしか無いからである。

しかし少年は昨日の報告を受けて図書館の中に混じつて、籠つてなにやら、といつた事をした中にはいなかつた。そもそも少年はそんな必要を感じなかつた。だから、今日少年が図書館に行く理由は別の要件によるものである。それは、昨日、図書館に籠つた学生の一人である、彼の友達に呼びだされたからだ。

ようやく図書館が見えてきた。シグルズの中心に位置するこの図書館はシグルズが都市として成り立つたころから存在するためか、古典的な街並みよりも一際古めかしく、壮大な歴史を思わせる。

その正門前に見知つた顔を見つけた。整つた顔立ちに落ち着いた容姿のこの美丈夫はどこか達観したような目つきをしていて、少年といつよりも青年といつた感じである。

正門にいる青年は少年を見つけると、手にしていた本を閉じて遠くから少年に向かつて話しかけてきた。感情が欠けたようにも思える程の落ち着いた声だ。深く清んでいるので遠くからでも良く響く。

「遅いぞレイヴァン、もう時間が無い。三階に先行つて準備をして

いる。要件はこれから言つ。」

足早に去ろうとする青年をレイヴァンは引き留める。

「お~お~いケント、少しごらり待つてくれてもいいじゃねえか」「断る、早くしろ。」

ケントはそれだけ言つと図書館内に足早に入つていった。続いてレイヴァンが今まさに閉じようとしていた図書館のドアに減速するごとなく突つ込む。受付の老婆に睨まれたが、華麗に無視し、ケントの後を追う。しかし、ケントはよほど足早なのか既に姿は見え無かつた。

仕方なくレイヴァンは階段に急いだ。階段は一つしかない、続いて

いる方向は上ではなく下、つまり地下に繋がっている。階段を下りきり速度を緩めたレイヴァンは地下なのに

何故か少し眩しいぐらいの廊下を歩く分岐点が多い通路を迷いなく進む。壁は灰色一色で、ドアは黒檀で出来ている。町と違つてここは狭苦しかつた。

ケントと部屋を示し合わせていないので、レイヴァンの歩みは目的の部屋を知つてゐるかのように淀みが無い。いや、事実知つてゐるのだ。現在の世界を震撼させ、そして一般的に広まつた『ブルーム』によつて。

ブルームとは修行を積んだ人間が何らかのショックを受けるなどすると、その人の中に蓄えられた才能が何らかの形で現実に出てきてしまい、人間の領分を越えてしまう現象のことである。この現象の瞬間をある詩人がブルーム開花と例えたことより、そう呼ばれるようになつた。

ブルームは生活用から戦闘用まで多彩な用途を持ち、特に戦場にも出せる程にまで戦闘に特化したブルームを会得している者をスキルホルダーといふ。

ただ、『修行』といつても大仰な事ではなく、きっかけさえあれば、今まで自分自身でも気付いていなかつたぐらいの能力でさえ、ブルームとして会得してしまうこともある。つまりブルームを使う光景は今や珍しくない。特にこのシグルズでは、最低でも一人ひとつはブルームを獲得している。

現にレイヴァンが目的の部屋を知つてゐるのも、ブルームを使って、ケントと交信していいたからである。因みに交信の為のブルームは基本的に誰もが持つてゐる基礎的なもので、離れていても気軽に通話などができる。他にも多くのブルームにより人々の生活は成り立つてゐる。

レイヴァンは目的の部屋に着いた。しかしどアが半開きだったので、結局ブルームを使う必要は無かつたのだが。

レイヴァンが部屋に入ると、ケントが話しかけてきた。

「いましがた必要な文書を取つてきたところだ。レイヴァン、少し厄介なことが起きたのだ。」

「ちょっと待てよ。その前に今までどうしてオレが呼び出されたか聞いてねえ、話を始める前に教えてくれてもいいんじゃねえのか？」抗議するレイヴァンに無視し、ケントは早く座れ、と、近くの椅子を親指で指差した。仕方なくレイヴァンがそれに座ると、ケントが口を開いた。

「昨日俺が図書館で調べ事をしていたのはしっているな。そこで俺は偶然なのだが、先生達が話込んでいるのを聞いてしまった、内容が内容なだけに、お前に伝えとこうと思つたのだ。」

レイヴァンの抗議を無視しながらも、重要そうな切り出し方であつたし、結局ケントがレイヴァンを呼んだ理由を話し始めたので、レイヴァンは口をつぐ噤んだ。

「シグムンド帝国の歴史にも通じることなのだが……。」

「オレが解らねえとでもおもつたんか？それだつたら問題ねえぜ。」

「今までいくら戦争で戦況が悪化しても学生が戦線に立つことは無かつたことなのだが、……知つてているのだな」

「しつけえな、ケント。そんぐらいは解るぜ。シグムンドの歴史は知識人の歴史とも言えるぐらい、学者と学生に密接にから絡んでいりし、未来の知識人たるオレたちは将来シグルズを内面から支える役だから、傷つける訳にはいかない、とかの理由だつたよな」

「解つてるなら話を始め易くて助かる。」

「それで？」と先を促すレイヴァン。そしてケントはやつと本題に至つた。

「俺が昨日聞いた話に寄ると、俺達知識人が戦線に出されるらしい」「はあ？オレの言ったことの真逆じやねえか。それにいまいち現実味がしねえな、学校の生徒で戦場に行つた奴なんて聞いたこともねえし、第一、オレ達学生が戦線に行つたところで何ができるって言うんだ？」

「問題は最近の学園の教育方針にある。それはだな……。」

しかし、ケントが説明しようとした矢先、部屋にフルフェイスマスクで顔を完全に隠した少女が勢いよく入ってきた。

盗み聞きされていたのか、と焦る一人だが、マスクの少女はそのマスクを外して二人に向き直つた。少しウェーブがかかつた群青色の肩に届かないぐらいの髪が下に舞い降りる。緑の瞳は若干の怒気が含まれていて、まっすぐレイヴアンに注がれている。息を切らしているのか、少し声が大きい。

どうやらレイヴアンの知り合いらしく、ケントは警戒を解いた。

「レイヴアン！ アンタなんで家にいないのよ…？」

レイヴアンが大きく溜息をついた。いきなり部屋に入つて来たレイヴアンの知り合いらしい開口一番やたら騒々しい少女に向けるレイヴアンは完全に呆れた表情を向ける。

レイヴアンの反応から、どうやら敵やスパイの類ではないようだと安心するケントと、会話を邪魔されたレイヴアンはそれぞれの反応を少女に返す。

「いや、どうして來たんだよ、セレナ。」

レイヴアンの声色には多少疲れているようだ。対照的に乱入者であつたはずの少女は、さつきのレイヴアンの言葉に完全に逆上していた。緑色の目には少し涙目にもなつていて。

「『どうして來たんだよ、』ってどういう事？ 私はアンタの家に行つたのに、アンタがいなかつたからここまで探してやつたのに…」

怒る少女の言葉にレイヴアンはちょっと眉を持ち上げ、

「？ 心配してくれたのか？」と、さつきの剣呑な雰囲気は單なる戯れだったのか、すまし顔で？ 気に聞いたりしている。

「なつ……！？ そんなことないわよ…！ 私は大体アンタが休日の朝早くから家を空けているから探してあげただけよ…」

「益々妙だな、どうしてこんな時間から、オレの家に来てんだよ」

「忘れたの…？ わたしはただ…」

ここまで言つていきなり赤面した少女にさらに追撃を加えようと

するレイヴァン。そこでケントが割って入る。

「どうしたレイヴァン、さつきからこの人、セレナと呼びつかれは誰なのだ。」

ケントの問いに気付いたレイヴァンが答える。

「ああ、こいつはセレストナっていうんだ。同じ学校に通ってるんだから見かけたことぐらいはあるだろ」

「本名はセレストナというのか？」

「そう、でも皆からはセレナって呼んでもらってるわ。あんまり長いと変だし、あなたもそう呼んで」

「気持ちは解つたが、俺からは本名の方で呼ばせて貰う。しかし、どうしてここが解つたのだ。」

そう聞くケント。確かに彼にとってこれからレイヴァンと極秘の話をするのだから、容易に居場所が判られては困るからこの質問は当然といえるだろう。

「ふえ？　ああ、私はレイヴァンと常に交信出来るからよ」

そんな事ができるブルームをケントは聞いたことが無いが、交信のブルームは人間の精神的な部分に大きな干渉を受ける代物だ。ある程度近くに通信対象がいなければ通信が成立しない。もし仮に交信できるとしたら、この二人は無意識下でかなりシンクロしていることになる。平たく言えばかなり親しい、もしくは惹かれ合っている関係であれば説明がつく。しかしセレナはケントにとつて初対面の人だ。ケントは無遠慮に身の上を聞く事は自分の条理に反するので深い詮索は止めておく事にした。だがもしこの少女が間者に通じる可能性があるなら、それは阻止しなければならない。結局二つの思量のうち、後者が勝った。

「セレストナ。済まないが自己紹介をして欲しい。なぜなら……」

「ああ、それなら問題ねえな、セレナ？」

「構わないわよ。」

「えっと、私はセレナ。一応シルフィエンドではレイヴァンと同じクラスで、レイヴァンとは同じ施設出身ね。それと寮ではレイヴァンのとなりの部屋よ」

セレナは最後の部分を特に強調したが、それ以外は特に問題は無さそうだ。

「よくベランダから勝手に入つて来るから困つてるぜ」

その言葉にセレナが急に食つてかかる。

「なにそれ！？ 変なこと言わないでよ、誤解されちゃうじゃない！」

「間違つた事は言つてないぜ？」

「アンタにご飯作つてるだけじゃない！ 今日なんて特にがんばったのに……」

会つて早々に二回目の言い争いを始めてしまつた。どうやら二の二人は仲が悪いのかすぐ口論になるようだ。ケントは一刻も早くレイヴアンに用件を伝えたいのだが、セレナがいてはどうにもやりにくい。しかし五月蠅い相手だとしても、レイヴアンを追つてきた少女を追い出すのはケントの紳士心が咎めた。

「だいたい、何があつてお前はマスクなんて付けてきたんだ？」

ケントの苦悩にお構いなしにレイヴアンはセレナにまた口論の火種になり内容を聞いている。ケントは危機感を感じたが案の定、また始まつてしまつたようだ。

「すぐそこで拾つたのよ。おもしろい形だしアンタを驚かそうと思つてかぶつて来たの！ 朝からスカされて頭きてるんだから！」

「そんなことは無えだろ、ここら辺に常にフルフェイスのマスクを設置している訳無えじゃねえか。普通テロリストかなんかが使う物だぜ？」

「ふえ？ だつて本当に落ちてたんだもん」

ケントはといふとまた言い争いを始めた二人に完全に主導権を一人に奪われたらしく、思い切り劣勢だ。

ギャアギャアと言い合いを続ける二人をケントはいよいよ本格的に頭を抱えそうになつたが、元々レイヴアンを呼んだ内容さえともに話し切れていない事もあってかなり切羽詰まつている。何とか話の流れを自分の方に向つて行きたいのだが、事態は一向に改善

しそうにない。

その硬直状態を解いたのは凜と清んだ声だった。

ケントが声のする方を見ると、部屋に入り口に流れのような長い濡羽色の黒髪をカチューシャで背中に垂らした女性が立っていた。レイヴアン達と同じ制服を着ていたが、歳はレイヴアンと同じぐらいか少し上、といったところだ。

「貴方達。少々おふざけが過ぎませんこと? 貴方達の声は他の部屋にまで届いていますわよ。ご存じかしら?」

いきなりの棘のある言葉使いだったが、唯一部屋の中で女性に気付いたケントが対応する。

「それはすまないことをした。今すぐ止めさせるから安心してくれ。」

「当然よ。…………あら? そこのあなた、その手に持っている物は何?」

女性の皿はセーラーが被つて来たマスクに注がれている。  
「それをどこで拾ったの?」

いきなり聞かれたセーラーは一瞬「ふえ?」と変な声を出したが、「ああ、これ? これならさつき廊下で拾ったの」

と、無邪気に答えた

「いいえ、これは私たちの物です。無くしていて困っていたの。勝手に持つて行かないでくれません?」と?」

「そうだったの? 帰りがけに受け付けのおばちゃんにでも渡そうかと思つてたんだけど……」

「とにかく返してください。私たちは大切な物なの」

そう言つが速いか女性はセーラーの手からマスクをひつたくると、素早く、しかし優雅に身を翻した。そのまま部屋を出ようとすると彼女に。「おい、待てよ」と言つたレイヴアンの声に全く耳を貸さず、無言で去つていった。

「何だつたんだ……? あいつあ?」

レイヴアンが一人つぶやいた。あまりの突然のこと、思い切り振

り回されたのは、レイヴァンの生来の性格には珍しい事だったのだろう。他の二人もまだ整理がつかないようで、呆然としている。

少したつた後、思い出したようにレイヴァンが「しつかし、」口を開いた。

「どうしてあいつはマスクなんて物を持つてつたんだ？」

「どうして……って、もともとはあの人の物だつたからとか言つてたじゃない？」

「そういう意味じゃねえよ、あのマスクはどう見ても普通は手に入らないはずだからな。なんであいつは自分の物だ、と言い張つたんだ？」

「確かに、レイヴァンの『いつ』とは一理あるな。あのような物は普通に生活していたら関わることはまずないからな。」

ケントが「だが。」と一瞬間を置く。

「俺の話が脱線しそぎていい。お前らには生憎だがその話題に終始するよりも、俺の話題にそろそろ話を戻してもらおう。」

ここでケントは一度言葉を切り、セレナを申し訳無さそうに見た。

「そこでだが、少し悪いがセレストナさんには席を外してもらいたい。」

そう言われたセレナだが、なにせ今までのレイヴァン達の流れを全く知らずに部屋に入ってきたセレナはつにせつと同じように

「ふえ？」と聞き返した

「申し訳ないが、なるべく今俺たちが話している話の内容を他の人に漏洩することは少し気が引けてな。せっかく身内を追つて来てくれた人を追い返す事はしたくないのだが……」

「話？……というここはあなた達一人は眞面目な話でもしていたの？いつものようにレイヴァンが勝手に家を出てつただけじゃなくて？」

「『いつものように』って、いつもはそんなことしねえぜ。オレはここでレイヴァンはガリガリと頭を搔きながら一応ケントを肯定しておぐ。」

「ああ、そうだ。オレはケントに呼ばれてここに来ただけなんだ」

「そうだったの？」

「まだその話の本題まで聞かされてないんだが……」

「誰のせいだと思つていい、レイヴァン。不意で脱線気味だったが、早く話してしまいたい。」

「セレナ、そういう訳だぜ。すまねえな」

「解つたわ。じゃあ一階のロビーで待つてるから」

セレナが部屋を出て行き、それにレイヴァンがついて行つた。見送つただけらしく、すぐ戻ってきたのだが。

「さて、間が開くことになつたが説明を再開しよう。俺達が戦場に送られる理由からだ。」

「ああ、それに、どうしてオレが呼ばれたかも教えて欲しいんだがな もう無視はさせねえぞ」

「解つたから黙つていろ。」

「じゃあ頼む。これからオレはしゃべんねえから」

ケントは一度頷いてから話し始めた。

「実は俺達がシルフィイエンド国立学園に入つた時に学園の方針が変わつたらしい。今までは生活に使うブルームだけを生徒に教えて来たのだが、俺達は護身術の名目上、戦闘用のブルームを仕込まれた。」

「そうか？ オレはあんまりそんな感じはしなかつたが？」

「当たり前だ。俺達の第から始まつた事だから、俺達はそれしか知らないからに決まつているだろう。まだ戦況は悪化していないが、だがもうすぐ方針が変わつてから半年になる。試作品の兵器として生徒を試すには丁度良い頃合いだろう。あくまで試作品だから大量に出す訳にはいかないが、五、六人は駆り出されるのは確実だ。恐らく小隊として普通に任務を遂行することになるだろう。」

「加えて、シルフィイエンド国立学園は教育機関だ。在籍中の生徒を死なすような真似はしたくないだろが、この件は秘密裏だが帝国が絡んでくる。すると国策となつては話は別になつてくる。死人が

出ても揉み消し工作で何とかしてしまった。そこでだ。レイヴアン、お前に俺の作る軍隊に入隊してもらいたい。」

「つまり、お前はオレに死地に出向いて、死ぬときは死んでくれと？」

「端的に言つとそつだ。お前にはそれなりの理由があるだろう？　それにお前の戦闘用ブルームには欠陥があるとはいへ、十分な戦力になる。」

「ああ、解つた。オレたちはお前の軍隊に入る。それで良いな？」

「そうしてくれ。…………ん？　俺たち、だと？」

「そうだ。お前もそれで良いよな、・・・セレナ？」

呼ばれたセレナが自然な感じでドアから普通に入つて來た。ドアの前で陣取つていた用である。

「別にいいわよ、レイヴアン。ケントさん、よろしくお願ひします」お辞儀したセレナの髪がきれいに宙に舞つた。ケントが驚きで目を見開く。

「…………見送りに行つた時に立ち聞きするように言つたのか。

「二人共入つてくれて有り難いが、どうしてこんなまねを？」

「そりやそうだぜ。戦線とか聞かされたしな、オレのブルームの『欠陥』してるとこはセレナの中に入つてるんだ」

「すると……セレストナさんがお前の片割れなのだな。　お前のブルームの一部が入つてしまつたのは。」

「そうだ。オレのブルームは全部オレの物じや無えんだ。半分はセレナの中にあつてな、セレナがいなきやオレは全力を出せ無えからな」

「そうそう。私がいないとレイヴアンは半人前だからね」

「おい待てセレナ。お前の場合はオレがいなきやあ半人前どころか半人前以下だぞ」

「止める二人とも。そうか、しかしこの人数では軍としては成り立たないな……少なくとも四人以上いなくては申請が出来ない。」

「ならばお前の妹がいるだろ。そいつを呼べば良いじゃねえか」

「冗談では無い。妹を危険な所につれていいけるか。ミイナはここに置いていく。帝都なら少なくとも一年は安全だ。」

「一年も待つてくれるかねえ……オレには駄々をこねてでもついてくるとしか考えられねえが」

「それは否定できないが、説得するしかないだろう。」

「よし、そうと決まればとりあえず今日はお開きだな?ケント。長い時間どつかで話合つてると怪しまれるぜ?」

その言葉で一同は解散した。的を射た事を言つた本人であるレイヴァンはセレナと一緒に出て行つたが、ケントは一人残つて少し先の事を考えていた。

最初の問題。人数確保が何よりも先決だ。そしてその次は……

ケントは思考の渦に一段落をつけると部屋を後にして、早く明日に備えてすぐに行動を起こさなければならない。ケントの日には強い使命感が宿つていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1615z/>

---

双炎の廻る回旋曲

2011年12月5日21時56分発行